

なるものである。

本書は寛元元年九月、入宋のため肥前松浦を出帆した船が途中颱風のため琉球に漂着した顛末を記したもので、慶政自身の体験ではなかったようであるが、記事は極めて写実的で想像による文飾が少なく十分信頼性を有するように思われるのは、かれも建保のころ一度入宋して仏像経巻等を將來したことがあったことにもよろう。記事中もつとも興味のあるのは、風のために琉球らしい島に漂着した一行が恐る恐る上陸して最初に見た仮屋の炉の中に人骨を見付けて一同魂を失い、まがう方なき琉球国へ漂着したものと観念したという条で、恐らく風葬洗骨の習俗ある琉球で葬屋に用いられた仮屋を見ての印象でなかつたかと思われるが、「今昔物語」卷十一中の記事にもあるように、中世には琉球は食人種の住む島であるとの観念がひろく行なわれていたことを思うと、かれらの速断と恐怖もあながち無理からぬところといわねばならない。一行はその後村人に会い米を与えて代りに紫苔と辛とを贈られ無事に宋への渡航を終るのであるが、巻末には、赤巾をもって頭をまとい、赤衣を着て腰に銀帯を用いた琉球人が軽

舟を駆って弓を射る様を描いた絵が添えられている。それは決して素人ならぬ巧みな筆致で、筆者慶政に大いに絵心のあったことを知らせてくれる。本文と相俟って数少ない中世の琉球史料としてもっとも珍重すべき文献といふべきであろう。

なお本書の紙背は仁治三年十月日付松尾社前神主秦相人陳状となつて居り、同社領越中国松永荘、信濃国今溝庄ならびに神主職の相続に関する二族の争に關連するもので、表記の文献とは何のつながりも認められないが、独立して中世荘園史の研究に十分役立てうるものであろう。(非売品) (柴田 実)

会報

二月例会

二月二日(土)午後一時より

於 京都大学史学科第二教室

インド史の時代区分

岩本 裕

(発表内容は論文として本誌に掲載予定)

東南アジアと日本

岩田 慶治

——比較民族学の試み——(スライド使用)

〔要旨〕 東南アジアと日本とは互にきわめて類似した社会をもち、文化をもっている。ともに東アジアの種作文化圏にぞくし、人種的にも互に近縁である。しかし、一歩たち入

つて東南アジアと日本との比較を試みようとする、なかなか厄介な問題がでてくる。似ているということは疑いない事実なのであるが、さて両者の系統的關係を実証しようとする、たちまち数多くの難点に逢着することになる。また、ときには証明不能の事実に出くわすことにもなるであろう。そこで、さしあたってここでは次のような方針のもとに両地域の比較を試みることにした。(1)どのよう

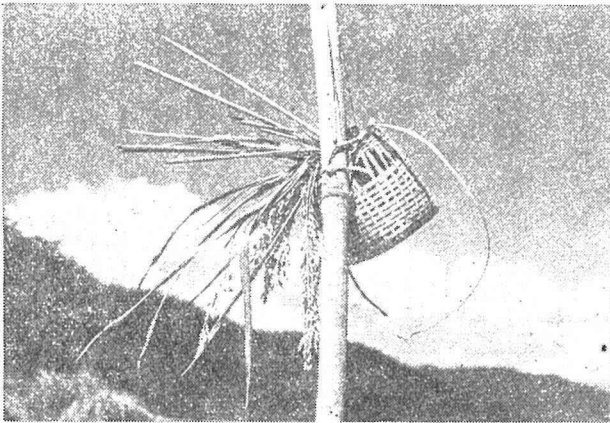
に些細なことがら、断片的な資料でも拾いあげてゆくこと、比較資料を豊富化すること、

である。(2)多様な現象の背後にあって現象たらしめているもの、文化の様式的統一に機能していると思われる住民のものの見方、考え方、信仰などについて考えてみることである。以下、主として第2の点について要約する。

1 タイ人、ラオ人における人生の折目について、あるいはかれらがその人生をいかに目盛りづけているかについて考えてみた。例えば、ラオン・デン（赤児）、ラオン・ノイ（少年）、ラオン・ヤイ（青年）、ヌム・バオサオ・バオ（男女の壮年）、プー・ヤイ（大人）、コン・ケー（老人）、コン・タオ（老人）といったタイ・ヤイ（ジャン）族における年齢区分、人生目盛りの持つ意味を日本における事例と比較すると、そこにはひろく稲作社会に共通する年令ないし人生の社会的意味づけを見出しうるのではなからうか。

2 東南アジアと日本における稲作が技術的に互にきわめて類似したものであることはいうまでもない。田植えの方法だけをとりまいても日本におけるさまざまな型がそのままタイ・ヤイ族とその周辺の村に見出される。脱穀・調整の方法も一昔まえの日本そ

っくりであるし、もちろん農具も殆んど同じである。そしてここで特に注意したいことは稲作労働の裏打ちとしての稲作儀礼における類似性である。それは一つには稲作儀礼における稲魂の輪廻・往還に關してであり（タイ



タイ・ヤイ族の穂魂

・ヤイ族では田と家・米倉の間を往復する）、二つには稲魂の性格に關してである。タイ・ヤイ族における稲魂は「卵の黄味のカミ」と呼ばれるが、タイ・ルー族のそれは「土地のカミ」であることなど今後の研究課題として興味あるものと思われる。

3 最後に東南アジア、とくにタイ諸族における固有信仰、つまりピー（精霊）とピー祠（ホー・ピー）をめぐる信仰について考えてみた。要するにこれらの信仰と制度とが南シナを媒介として日本の原始神道との類似性が指摘されるということ、ただし日本の場合のようにここでは信仰・制度の進化・発達をみることなく、むしろ（村の信仰）から（家の信仰）へと信仰集団の分化と萎縮化とがみられる点に特色がある。

何れにしろ、まだ問題は未解決ではあるが、「人」と「稲」と「村」のいのちをめぐる民族の考え方、信仰形態において東南アジアと日本とがきわめて多くの類似点を共有していることは疑いない事実である。（岩田慶治）

学界消息

読史会 一月例会

一月十二日(土) 午後一時より

於 京都大学楽友会館(以下同)

徂徠学の性格

近世中期の農民闘争

二月例会

二月九日(土) 午後一時より

近世後期の農家経済

郷村制の形成

京大東洋史大学院会例会

二月八日(金)

於 楽友会館

山西商人について

中国中世史研究会例会

二月二十四日(日)

於 名古屋大学文学部

シムボジウム

中国史に於ける中世について

発表者

横山裕男

西洋史読書会例会

於 京大西洋史研究室

一月十九日(土)

W. T. Mommsen "Max Weber und die deutsche Politik" (Tubingen, 1959) にこする

一月二十六日(土)

Samuel Adams にこする

一月二十二日(土)

人文地理学会 第四十九回例会

一月二十二日(土)

於 京都大学教養部

日本離島の諸問題

都市の周辺活動

第五十回例会

二月二十三日(土)

於 京大人文科学研究所本館

越後平野海岸砂丘地の農業

バンジャブ・ヒマラヤの旅より

清代駅伝の一資料

日木人類学会・日本民族学会

第十七回連合大会

昭和三十七年十月十二日~十五日

於 東京大学理学部二号館講堂

第一日(公開講演)

ネアンデルタール人類の発掘

鈴木 尚

アラスカのエスキモー

ポリネシア人類学紀行

第二日(研究発表)(以下抄録)

化石骨のX線回折像と弗素含量

最近ケニヤで発掘された化石類人猿の意味について

仏典における相好観の人類学的研究

ネオメラネシア語の発生

タヒティの Matainaa について

ミナンカバウ社会の父親の地位

Mud sled on Muddy Tidalzones in Southeast Asia

タイ・ヤイ族およびタイ・ルー族における稲作儀礼

穂落神

顕著な島嶼海岸崖葬の一事例

奄美大島一口信仰における神概念について

日木語とツングース語との比較研究について

白鳥処女説話の系譜

日本にも鮎苔は伝わっていた

朝鮮の三層信仰

岡 正雄

島 五郎

渡辺直経

フリッシュ

嶋 善一郎

浅井恵倫

鈴木満男

中沢 勇

西村朝日太郎

岩田慶治

小林太良

小川 徹

J. KREINER

大野 晋

福島千賀子

岩井大慈

窪 徳忠

本製の製作について 中村たかを

毒魚「アカエイ」とその民族学的考察 石川元助

民族芸能を中心とする栃木県神社史 川島守一

(特別講演) The Central Highlands of East New Guinea H. Aufenanger

第三日(研究発表)

父・乳・母・噂・噂・papa. mama. unma. oppai 考

アイヌと仏教の問題について 山中襄太

(コタン報告)アイヌの子守歌 田中実

アイヌの作物起源説話 伏見文男

千島アイヌの鳥羽衣 林善茂

文化人類学と歴史学 犬飼哲夫

カルチュアとパーソンナリティとの関連について 横田健一

親族名称の分析方法について 藤岡喜愛

近代日本農村における通過儀礼の変遷要因 綾部恒雄

「親類」の概念規定について 米山俊直

同族結合の意識と実態 中根千枝

天草の大家族制 大森元吉

インカ村落の社会的緊張 牛島盛光

グワラニー族における反文化的変容 三浦信行

イスラエルにおけるキブツの社会史 大給近達

的性格 山根常男

マオリとモリオリ頭骨の研究(1) 純木誠・島五郎・上条雅彦

北海道日高地方における墳墓の分布 藤本英夫

オンノロナイ遺跡発掘報告 大貫良夫・岡田宏明・松谷敏雄

北海道江別市坊主山遺跡出土人骨 山口敏

北海道有珠貝塚出土人骨の研究 小浜基次・欠田早苗・保野彰三

鹿兒島種子島広田遺跡より出土せる弥生式時代人歯牙の計測値について 山田博・中川三省

縄文遺跡出土の貝類の採集時期の推定について 吉田いくを

考古学における統計的方法 幸田和夫

お倉ガ沢調査報告 中島隆

第四日(研究発表)

沖繩の地名と民族 畑中友次

イラン北部における民族の興亡 池田次郎

石器から見たアムド洞窟人類 渡辺仁

日本語とモンゴル語の若干の語彙の比較 小沢重雄

極北捕鯨文化の伝統 岡田宏明

アラスカエスキモーの社会構造に関する若干の問題 蒲生正男

第二次明治大学アラスカエスキモー調査の概報 岡正雄

(特別講演) The Dignified Attitude of the Royal Uigurs A. von Gabain

広島史学研究会・中四国歴史学・地理学協会連合大会 昭和三十七年十月二十日・二十一日 於 広島大学

第一日 シンポジウム「変革期における政治思想」 国会開設要求運動イデオロギーの性格規定 児玉雄三

新三民主義の形成 中山義弘

三月前期におけるブルジョワ政治思想の一考察 千代田寛

(公開講演) いわゆる聖徳太子の摂政について 小倉豊文

歴史における自由と平等 千代田謙

第二日(日本史部会) 日本書紀層についての卑考 小野惟之

日本神話における八島と日向と葦原 筑紫申真

について 友田吉之助

豊受大神と旧日本紀 押部佳周

古代明法家の教養

莊園に対する国司免判の發生について

坂本賞三

芸北における村中入会の成立過程

道重哲男

鳥取藩における初期藩政改革の問題点

山中寿夫

幕末期の農民儒者とその背景 前島雅光

幕末期広島藩における改革党について

畑中誠治

地租改正の総括的把握のための一試論

有元正男

「猪熊信男氏旧蔵文書」について

福尾猛市郎

湖広における辛亥革命の動向 福田節生

一八一一年のパレムバン事件について

伊東隆夫

明末の塘長について

森田明

景德鎮陶業と都市共同体

高中利恵

元末明初の聖人像

寺地遼

宋初河北路における塩政に関する一考察

河原由郎

道蔵の成立

大淵忍爾

桓玄

板野長八

前漢皇帝陵邑への徙遷に就いて

好並隆司

「別国方言」に見える若干の漢代方

木曾川下流の耕地整備

白井義彦

言について

(西洋史部会)

カール大帝の戴冠に関する最近の諸研究について

田井靖侃

叙任権闘争前におけるテューリンゲン貴族支配制

早川良弥

イギリス絶対王制における治安判事の統治機能について

梶谷宏義

ルソーの「戦争状態論」について

西島幸右

エドマンド・バークとアイルランド革命

鶴田正治

ドイツ歴史主義成立の基礎過程

吉武夏男

「新歴史」学派の特色

渡辺真治

ドイツ抵抗運動の思想的基盤

寺坂精二

Historical Explanation をめぐって

河瀬明雄

諸論について

高山一十

オクスフォードにおける思想史研究の現況

桑代 勲

(地理部会)

四国北西部の地盤運動

石井峻一

阿蘇外輪南部の中央線

八代干拓地における集落計画

小笠原節夫

二級峡付近の地形

土居進一郎

木曾川下流の耕地整備

白井義彦

大西正男

九重火山

水稲北限地域について (第一報)

藤木健三

北九州における営農形態の統計的考察

森川 洋

沖繩伊平屋群島の地形及び地質について

武永健一郎

六甲山地の活動性

岡 義記

(考古・民俗部会)

瀬戸内における縄文晩期文化

潮見 浩

山陰の弥生式土器について

藤田 等

伊豆山木の木器について

木下 忠

佐伯町を中心とする遺物と遺跡

今田進・田中利水

広島県三次市川西所在の古墳時代中期のシスト群

木村豪章

烽の研究

豊 元国

神話考古学の提唱

筑紫申真

古代火葬墳墓研究提要

松下正司

(社会科教育部会)

工業高校に於ける学習態度について

高城博昭・棚田純孝

中国における歴史教育に関する一考察

山本一成

社会科教育の比較研究

岡田孝章

歴史教育における南方史の問題点について

定宗一宏

高校歴史教育における世界史と日本史との関連
古林森広

ドイツ歴史教育における危機論争について
永井滋郎

歴史教育における人物の取扱いについて
藤井千之助

地図の本質についての一考察
灰谷富士人
金子 廉

歴史教科書にみられる資料の研究
上野実義

(特別講演)
越人の舟
松本信広

仏教史学会大会

昭和三十七年十月二十七日
於 京都女子大学

真宗における異義異安心と異端の問題
石田慶和

阿波・立光庵寺とその周辺
三好昭一郎

インドの仏教寄進銘文に現われたる願文について
静谷正雄

鴻臚寺と支蕃寮
田村円澄
三崎良周
宮川尚志

史学会第六十一回大会

昭和三十七年十一月十・十一日

於 東京大学及び東京大学史料編纂所
(公開講演)
日本古代農耕の系譜
南宋における鄉村制をめぐる諸問題

八幡一郎
周藤吉之

(日本史部会)
(第一会場)
維摩経義疏に関する一考察
佐官と僧綱
循帳について
平安中期の官衙財政
鎌倉殿勸農使について
中世芸能の演出型態について
諏訪藩における年貢取納制度
桜田文庫と西丸書物奉行
幕末開明思想の展開
明治前期紡績業の創設資金に関する一考察

望月一憲
田村円澄
吉田 孝
村井康彦
田中 稔
桑島禎夫
高木昭作
山本武夫
山口宗之
高村直助

第二会場
テーマ「封建時代における社会と宗教」
神仏の習合と習俗の変容
真宗と村落
真宗教団近代化の諸問題

(民俗学) 桜井徳太郎
(歴史学) 井上鋭夫
(社会学) 森岡清美

時宗教団の発展とその社会的基盤
(歴史学) 大橋俊雄

禪宗の発展とその社会的基盤
(歴史学) 今枝愛真
真宗教団の発展と異端の役割
(歴史学) 笠原一男

(東洋史部会)
マヒンダ伝説に関する一考察
居延漢簡に於ける兵卒名籍の整理
尾形 勇
福井重雅
長沢和俊
古賀 登

黄巾の乱の一側面
宋雲・恵生の天竺行
敦煌戸籍の一男十女について
唐均田制時代負担体系における課と税の意義
西村元佑
仁井田 陸
斯波義信
山田信夫

吐魯番発見の高昌国および唐代租田文書
宋代民間運輸業の諸機能
ウイグル文書の花押
(西洋史部会)
成立期(一・二世紀)におけるシヤテルニーの実体について
下野義朗
イギリス・マナー期の「雇傭労働者」について
篠塚信義
身分制議会と村落自治制
成瀬 治
アンシャン・レジム末期の土地所有分布
原 種行

イタリア・リソルジメントにおける「ジャコバン革命」期
北原 敦

ラムネーの社会思想—peopleと

PAUVRES 生熊來吉

ソ連—フィンランド戦争の起源とパ
ーシキヴィ 百瀬 宏

いわゆる全權委任法について 吉田輝夫

日本史研究會 一九六二年度大会

昭和三十七年十一月十七・十八日

於 立命館大学

第一日(個別発表)

大王から天皇へ

鎌倉仏教の再検討

近世初期大名領の財政問題

日露戦争後の軍事と政治

第二日(共同研究報告)

ふたたび「現代における歴史像の再
構成」のために

「前近代」前近代社会の日本的展開

八・九世紀における農民の動向

中世後期の商品流通と領主階級

幕藩体制下の思想構造

「近代」世界史における近代日本

日本帝国主義の成立と構造

日本帝国主義思想の成立

鈴木良・佐々木隆爾

飛鳥井雅道

東方学会 第十二回全国会員總會

昭和三十七年十一月四日 午後一時—五時

於 大谷大学

明末清初の南洋華僑 岩生成一

東管仏教に於ける浄土の理念 安藤俊雄

委員会だより

◇ 四六巻二号、本来ならば三月にお手許に

おとどけしている筈、大変おそくなりました

ことをおわびいたします。本号掲載の中に

は、非常に早くから御寄稿いただいていた論

文もありまして、執筆者各位にもごめいわく

をおかけいたしました。発行のおくれがやや

慢性化しておりますこと、委員一同気が気で

はないのでありますが、何分にも思うにまか

せぬのが近頃の印刷事情でありまして、あし

からずおゆるし下さい。

◇ 「学界消息」欄の拡充の方針は、前号に

もお知らせしましたが、関係学会各位の協力

をえましたので、本号より大幅に掲載範囲を

拡大いたします。各専攻ごとの論文目録は各

方面で作られておりますが、口頭発表につい

ては、せまい範囲でしか試みられておりませ
ん。本誌も、もとよりさきうるスヘイスはさ
ほど多くありませんが、この方針は、各位の
研究の一助としてお役にたつものと考えてい
ます。

◇ しかしながら、本欄をより充実するため
には、どうしても各位のご協力を仰がなけれ
ばなりません。どしどしニュースをお寄せ下
さいませう、お願いいたします。学会の動
向のみでなく新しい資料の発見や発掘などの
報道も、とりあげたいと考えています。学会
誌の使命は、各位の論文を掲載する、「発表の
場」であるとともに、「交流の場」をも提供
する使命をもつわけですが、その「交流」
をよりはば広く考えたいと思うわけです。な
お、ご意見をお聞かせ願えれば幸甚です。

一九六三年二月二五日印刷
一九六三年三月一日発行 定価二〇〇円

史 林 (第四六巻第二三)

発行所 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

史 学 研 究 会 振替京都市五二五番

理事長 宮崎市定 編集主任 赤松俊秀

印刷所 京都市下京区西七条御所ノ内東町三九

中村印刷株式会社